

未来に残したいもの 伝えたいもの

第4回 庄内に生まれ、庄内が支え、育む文化 (最終回)

荘銀総合研究所 研究顧問 東山 昭子

稲田が見事な色に輝き、稲穂の内なる力がみなぎり大きくうねっている。庄内平野が最も美しく豊かな香りで満たされる旬である。今年は雨が長く、梅雨明けなく秋に入ったので、農作物の生育には心配の多かった分、喜びもひとしおである。鳥海山や月山が蒼く静かだ。

科学が進歩したとはいえ、台風の進路一つ自由には出来ないことを肌身で感じ取っている人々は、謙虚であり、だからこそ人と人が温かく繋がりあって生きる誠実さを持っている。詩人吉野弘が語っていた「冬に傷めつけられてきた者は、春になった時の喜びを知っています。あの冬をもらって、春をもらうのは、単なる季節の変化ではなく、人間の精神が形成される順序のことだと思います」という言葉が、すんなり納得できる風土が庄内にある。

さて、鶴岡出身の「小菅留治」をご存じだろうか。作家・藤沢周平の本名といえご存じの方も多いただろう。この郷土出身の作家を応援し支えた逸話に、高山正雄の存在がある。高山は藤沢周平が夜間中学時代に勤務した旧黄金村役場時代の上司であり、高山の温泉宿・旧金沢屋は周平の生家と、山形師範を終えて勤務した湯田川中学校のちょうど真ん中にある。周平の姉は金沢屋で子守をするなど、両家は深い親交があった。高山は、周平を勤務していた鶴岡印刷から、村の役場職員として多少強引に引き抜いたが、それは庄内の郷学をしっかり教え込んでおきたいという熱意からであった。

その後、周平は重なる試練を経て作家となったが、高山はその苦難の日々を物心両面にわたり黙々と支えた。周平は著作が本になるたびに高山に贈り、本を手にするたびに高山は「留治の本だ」と神仏に祀り、必ずもう1冊同じ本を買い求めて応援した。たとえ息子に「貸してくれ」と言われても「自分で買え」と貸すことをしなかったと言う。

周平の作品「たそがれ清兵衛」「隠し剣鬼の爪」「蝉しぐれ」「武士の一分」「山桜」、そして「花のあと」が立て続けに映画やテレビとなり、多くの作品が売り出されている。その文体はちみつで格調高く、その世界はほのかな慈悲の微光に包まれ、耐えて生きねばならない人の世に「生きていてもいいよ」と、寄り添うぬくもりがある。そして凜として妥協しない芯の強さで健気さを伝え、静かに内に流れる涙で心を洗ってくれる。作家・藤沢周平の生の基底に流れるのは、大地を耕し天道を敬い、愚直なまでに真心を尽くして農に生きる人々の慎ましさでもある。

その作品は一人の天才が才のままに筆を運んだ作品ではなく、幼い頃から膨大な東西の古典から現代までの諸作を読み込んだ読書量の豊かさと、それをまねて遊ぶことなく不器用に、己と真向って精進する真面目さにある。若き日に日常の生活規範として教え込まれた、儒教的な倫理観は、漢学の香り高い城下町・鶴岡の精神的バックボーンから生み出されたものといえよう。

日本一の教員をめざした周平はその後「肺結核」と診断され、東京で療養生活を余儀なくされた。わずかに得た平安も短く終わった。しかし、鶴岡を離れても、高山をはじめ、同僚、知友らがそれぞれ周平の苦境を支え続けた。地元の人々は周平が作家としての世界を確立し、花を咲かせ得るよう、地道に根を支えたのである。少年期を過ごした郷里の風物は周平にとっては懐かしく、あたたかい。それが作品に描き出されている。日本が近現代化の病弊の中で失ってきた、心に憶うふるさと・人と自然の営みのなつかしさ、激しさ、かなしさが藤沢周平作品にはある。

庄内では日本のハリウッドを目指す庄内映画村も誕生し、藤沢文学記念館も来春開館する。藤沢周平の世界が大地にしっかり根を張って、日本の古典として読み継がれる世界をここ庄内に築きたいと願っている。